

江戸御繁榮に就て、下つきの本所迄も、年に増月を重ねて賑ひはびこり、士農工商爰に住し、江戸本所の通路今に於ては差別なく、偏に江戸と一所の如し、まかるに兩國橋一ツにては、常の通行だに廻り道多くして、諸用差開る由也、増て非常の折柄には、世人の難義、事に寄ては生死の境にも成なん、今一ツ中央に大橋興立あらば、大と成る世の扶け、是もろく、の御祈にも増りて能き善根ならめ、庶幾は尼が願の一筋開召開かせ給へとかきくとき仰ければ、綱吉公尤感伏し給ひ、此御願は國土の爲、廣大の御功德、後世不易の御善根なり、いかでいなみ申さんやと、即時に御催有て、其筋の役人へ仰付られ、忽橋成就す、即今の新大橋是也、實に此功德萬世に徹りて、桂昌公の寛徳を仰ぎ崇みける、

〔江戸名所圖會〕風羅袖日記

元祿五申年の冬、深川大橋なにかばかりけるとき、

初雪やかけかゝりたるはしのうへ

芭蕉

同じく橋成就せし時

ありがたやいたゞいて踏はしのまも

芭蕉

〔江都管鑰秘鑑〕新大橋開基從來之說之事

抑新大橋の濫觴は、憲廟

綱吉

徳川

の御時にや、元祿六酉年五月六日、御城にて町奉行の詰書能勢出

雲守を中の間へ御呼なされ、御老中列座にて、被仰渡は、濱町水戸殿揚地を深川元町へ新規に大橋可被仰付候、小普請方懸りに申達置候得共、猶又御評義の上、各懸りに被仰付候場所には有之候、御材木百七拾本受取て早速御普請申付べく候と也、出雲守御受申上られ、尙又いろく伺筋の義など申のべらる、其内に水戸殿上地の内に、乙ヶ淵といふ有、其外に池も有之候間、是をば如何可仕候哉と伺はれけるに、何も埋させて地面は平均いたさせ然るべきよし御差圖也、此節普請方懸りには、北條安房守組與力、安藤小左衛門、蜂屋彦大夫、能勢出雲守組與力、深澤十大夫、福岡藤